No.7

東京文化資源会議

［ティーチャ］

T-Cha

ニューズレター

東京文化資源会議
Tokyo Cultural Heritage Alliance

文化資源を活かす社会の新たな可能性を目指して

吉見俊哉

２０１４年６月に開催した第一回東京文化資源区構想策定調査委員会を発端に、準備も含めて５年以上もの歳月をかけて現在の東京文化資源会議の広がりが形作られてきました。既に立ち上がった10以上のプロジェクトや構想の提案等、成果は着実に浸透しつつあります。活動の根底には「１９６４年の東京オリンピック以来の成長期の価値観の呪縛を脱し、成熟した社会にふさわしい新たな価値観を具体的な都市の風景に実現していくこと」と幹事長の吉見俊哉先生（東京大学教授）は話します。

「１９６０年代の日本は『より速く、より高く、より強く』がスローガンでしたが、これからは『より愉しく、よりしなやかに、より末長く』、つまり過去の遺産を未来に向けて愉しく、サステイナブルに甦らせていくという新たな価値観への転換が求められています」

その価値観とは、古いものをただ懐かしむのではなく、古いものをリ

NEXT PAGE

サイクル、リノベーション、リクリエートしていくことによって新しさを生み出す価値観であり、歴史や文化といった人の力で紡ぎ出されてきた蓄積をもとに、未来を創造することです。東京は、過去150年にわたり未来ばかりに目を向け、過去を捨て去ってきました。その東京のあり方を変えることで、日本全体の都市の未来に影響を及ぼしていく活動として、文化資源区構想は動き出したのです。

3つの柱で進む文化資源を活かす

文化資源区構想には、3つの柱があります。1つ目は空間軸。魅力ある文化資源の拠点が点在する地域をつなぐことで新たな都市空間をデザインすること。2つ目は時間軸。これまでの新しいものが良いとされる直線的な未来像ではなく、古いもののなかに新しさを発見し、過去と未来が循環する時間軸を都市のなかに挿入すること。都市は一種のアーカイブで、再利用することのできる文化資源に溢れています。蓄積された資源の発掘を、次なる文化創造にとつなげていく仕組みが大切です。

3つ目は社会軸。都市は多様性の場であり、東京はそもそもコスモポリタンな都市です。湯島聖堂や神田明神、聖ニコライ堂、寛永寺、カトリックやプロテスタント、イスラムのお寺など、文化資源区一帯は宗教的な多様性に富んだエリアでもあります。また一帯は、かつて東京の大学の大多数が集中し、多くのアジア人留学生や文化人が集い、西洋文化をアジアに広げる近代文化の媒介者でもありました。さらに、上野は地方の農村出身者が東京へやって来る入口でした。こうした長年の多様性を内在させた地域の価値をいかに甦らせ、育んでいくかを考えなければいけません。

こうした3つの柱を軸に、具体的な活動に取り組んでいます。

TTTのように路面電車を復活させ、スローモビリティ、より速くからよりのんびりとの価値転換を実現することで街と人がインタラクティブになる。高齢者や障害を持った方でも自由で無理のない移動が確保でき、防災にも有効です。ゆるやかな移動によって街並みが見られているという意識をもち、街のクオリティが向上する契機ともなるのです。

エリア内の宗教施設をつなぎ、東京のなかで精神文化の拠点ネットワークを都心北部に形成していく取り組みもあります。神道、仏教、キリスト教、正教会、イスラム教など多様な歴史ある宗教施設がこれほど集中している地域は世界に他にありません。さらに、上野ナイトパーク構想のように夜間の上野公園のあり方を変えていこうとする試みもあります。

今の公園は、博物館、美術館中心の昼の上野と、繁華街中心の夜の上野が、客層としても完全に分離しています。そのため、上野公園の夜は人気もなく寂しい限りです。もともと上野は、夜でも不忍池や公園を散策したり、イルミネーションを楽しんだりできる場所でした。それを復活させ、ナイトミュージアムやナイトズー、ナイトパウンドを楽しめる公園にすべきです。

地域の文化資源の保全や利活用のための経済的な仕組みを提案するプロジェクトも進んでいます。この地域の文化資源を守るため、行政区を超えたマネジメントや制度を提案する取り組みに着手しているところです。

人の多様性を可能にする都市に求められる学びの場

文化資源区のもう一つの特徴に「東大や藝大を始め数多くの大学の集中」があると吉見先生は指摘します。大学は多様な人材が集まる宝庫であり、つながりの場でもあります。人生100年時代とも言われる現代、「人生で3回大学に入るのが当たり前になる時代が来る」と吉見先生は話します。

高校からの進学だけでなく、30代になって自身のキャリアチェンジを図るためや、60代になって残りの人生で何かを達成するために、新たに大学で学び直し、知的、能力的に生まれ変わっていく仕組みが必要です。人生の速度も画一的ではなくなるべきなのです。日本をやり直しが何度でもできる社会、それぞれの人生の速度でギアチェンジができる社会にしていくことが必要です。こうした媒介の仕組みを都市に組み込んでいくことも、文化資源区の構想の一部です。

文化資源区は、そもそも大学街でした。その周囲に書店街やスポーツから音楽、マンガやアニメまでの文化も形成されていったのです。重要なのは、個々のスポーツ、音楽、マンガやアニメを継承することだけではありません。それらの基盤を整えていくことが根本なのです。

実行力をもとに小さな積み重ねを

5年を経た東京文化資源会議の活動。構想が目指すべきものが実現するまでには、まだ紆余曲折があるかもしれません。しかし大事なのは、小さくても具体的な形にしていく実現力だと吉見先生は話します。

「ナイトパークやTTT、リノベまちづくり研究会など、他にも数多くの具体的な提案や実践、実現の道筋が見えてくることで、これが単なる空想ではないことに人々は気づいていくでしょう。机上の空論で終わらせず、具体的なプランを示し、関連機関やキーパーソンと交渉し、予算の目途もつけていくことで、社会もだんだん本気になり、実際に新たな風景に結実していくでしょう」

活動の一つひとつは小さくとも、それらを包括する大きなビジョンを軸に、着実に成果を積み上げていく。私達の考える考えや未来に対する価値観に対して、数多くの賛同者や協力者も増えてきました。2019年、2020年、そして2020年以降の日本に対して、新たな可能性を示す旗となることをこれからも目指し活動してまいります。

（記事構成：江口晋太朗　撮影：鈴木渉）

T-Cha NOW TOKYO PROJECT

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、
東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。
ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。

プロジェクトスクール 第6回フォーラム開催 文化資源を担う人を育成

2月19日に、東京文化資源会議第6回フォーラムとして「まちづくりプロジェクトスクールの可能性：『文化資源を担う人』を育てるまちなかのしくみ」を開催しました。

前半は、運営チームからのプロジェクトスクールの構想と3年間の活動の報告、清水義次氏（株）アフタヌーンソサエティ代表）、佐々木龍郎氏（株）佐々木設計事務所代表）、田村誠邦氏（明治大学特任教授（株）アークブレイン代表）、後藤治氏（工学院大学理事長）による、文化資源としての不動産のプロデュースとリノベーションからのまちづくりへの展開、制度活用の考え方など、まちなかでの活動に関する講演、後半のパネルディスカッションでは、まちづくりの現場でどのように「場・人・コト」を結びつけ、人を育てる場とするかを、会場からの質問を受けながら議論しました。

フォーラムの成果は、これまでの活動と合わせて報告書としてまとめる予定です。

「帝都物語」の地図カタログ制作、佳境近日発行

地図ファブでは「帝都物語」地図カタログの冊子づくりを本格化しています。作者である荒俣先生ご本人をホストに、テーマに関係のある登壇者をお迎えして開催してきた2回のトークセッションと最終シンポジウムの内容を受けた、帝都物語で東京文化資源区を読み解くカタログ（＝地図集）です。近日中に発行予定ですので、ぜひご期待ください。

また、アーカイブ事業は、これまで地図を集めることを中心としてきましたが、地図そのものに加えて「文化資源POI（Point of Interest）」に関する情報も厳選して集めていくことになりました。アーカイブされた地図と文化資源POIをテーマ・特集に合わせて「見せる」ことができるwebサービスとして、プラットフォームの実装を進めています。

映像で伝える本郷の記憶と語り継ぐ町並み

2019年3月3日に文京区西片で開催された「第4回文京映画祭」に、本郷のキオクの未来プロジェクトが参加し、本郷の各種記録映像を放映させていただきました。映像提供は昨年に引き続き2回目となります。

文京映画祭は、文京区の区民が中心となって開催している映画祭で、4回目の今回は文京区内外の映画作品を集めた一大イベントとなりました。

この機会を利用し、本プロジェクトでは10分間の映像でプロジェクトの成果紹介をさせていただきました。特に、本郷の東大正門前から伸びる「宮前通り」と「三角広場」、2018年に取り壊されてしまったコミュニティスペース「もりばあのいえ（旧カヤシマベーカリー）」の空間記録映像をたっぷりとお披露目することができ、地域住民の方のご意見もいただくことができました。

本郷のキオクの未来プロジェクトでは、現在、活動報告冊子の製作を進めています。来年度も引き続き活動を続けていきますので、何卒ご支援のほどをどうぞよろしくお願いいたします。

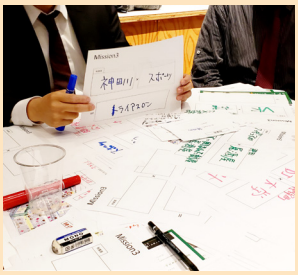
エンタメ特区に向けてアイデアソンから秋葉原の未来を育む

「広域秋葉原作戦会議」プロジェクトは、2月26日（火）に2回目となるアイデアソンイベントを開催しました。アイデアソン（Idea-thon）とは、アイデア（Idea）とマラソン（Marathon）を掛け合わせた言葉で、テーマについて、様々な分野の人々が集まり、グループディスカッション等を通じ、新たなアイディアを創り出すものです。

前回では「ライブエンターテイメント特区を考える」として、2020年に秋葉原がライブエンターテイメント特区になったらとして、秋葉原のこれからの姿について3つの特区案を参加者で考えました。

2回目は「アキバ拡張作戦」として、「さまざまな人を惹きつけているアキバ文化を周囲の街にも広げるためのアイデア」について参加者で考えました。どのようなアキバ文化を周囲の街に広げていきたいか、周囲の街にもともとあった文化とアキバ文化をどのように混じらせることで、新しい文化が生まれるのかを検討しました。当日はファシリテーターも含め21人の参加者が集まり、和気あいあいとした雰囲気の中で4つのアイデアが誕生しました。

これまでのアイデアソンで誕生したアイデアは、東京文化資源会議のウェブサイトで順次公開していく予定です。



モビリティを起点に新しい都市生活像と都市文化を考える

トーキョートラムタウン（以下、TTT）プロジェクトとしては、2回目となる公開ラウンドテーブルを3月18日に開催いたしました。テーマは「スローモビリティが変える東京の都市生活」。産官学民、専門領域も異なる9名のご登壇者の方々による熱気あふれる議論が展開されました。

「都市政策・制度といったトップダウンの観点」と「文化資源区というローカルからのボトムアップの観点」がひとつのテーブルの中で融合していくという、TTTプロジェクトの醍醐味が実感される内容となりました。会場も満員御礼となり、TTTが投げかけるテーマに対する注目の高さが伺われました。

今回のラウンドテーブルで議論された内容を踏まえながら、今後のアクションプランを策定しています。また、地域と地域、人と人を繋げていくというTTTの特性を活かし、東京文化資源会議の他プロジェクトとの連携・コラボレーションも推進していく予定です。

T-Cha NOW TOKYO PROJECT

湯島神田上野にエリア拡大 異分野を繋ぐ社寺会堂塾、始まる

湯島神田社寺会堂検討会は、寛永寺とアッサラーム・ファンデーションが加わり、エリアも拡大したことで、名称を「湯島神田上野社寺会堂研究会」に変更しました。第3期は宇野求氏（東京理科大学教授）から吉見俊哉氏（東京大学教授）に座長のバトンが戻り、第2期の成果をもとに今後の方針をまとめました。具体的には、①散策路を辿る②学術・宗教施設による合同イベントを開く③エリアビジョンを描き、ささやかな景色を創る④「社寺会堂塾」を営む、の4つです。

駿河台・湯島・上野一帯を対象に、早速試みを始めています。社寺会堂塾では、中島隆博氏（東京大学教授）主導のもと、各回違うテーマを扱い、異分野を緩やかにつなぐ議論の場がうまれています。学術・宗教施設に会場を提供していただき、歴史ある建物を身近に感じることのできる機会にもなっています。先日開催された第3回は「明治初期の正教会における祈りと漢訳教典」と題して、畔柳千明氏（東京大学大学院博士課程在籍）にニコライ堂でお話いただきました。

夜間の文化資源を提案する 上野ナイトパーク構想シンポジウムも開催

2020年オリンピック開催年における国内外の観光客誘致だけでなく、上野公園及び周辺地域は東京・日本観光、および様々な人達が行き交うハブとしての場所でもあります。これまで上野スクエア構想、湯島神田上野社寺会堂研究会など周辺地域での文化資源活用策を本格化してきてきた東京文化資源会議では、これらのプロジェクトと連動させながら、公園や公園周辺にある文化資源の新たな活動を目指し、2018年10月より夜間における上野公園の文化資源や施設の全面的な活用策について、関係各方面に提案を行うため「上野ナイトパーク構想会議」を設立し、これまでに3回の会議を実施してきました。

3回の会議での議論などをうけ、2018年4月3日に公開シンポジウム「上野ナイトパークが日本を変える」を実施します。これまでの検討結果の報告を行うとともに、今後の上野公園及びその周辺地域のあり方について産官学民を横断して論じる場としています。夜間の文化資源の活用に向けた提言をもとに、今後は具体的な活動に向けて準備を進めてまいります。

編集後記

今回のT-chaで取り上げたように、ここ数ヶ月は各プロジェクトによる様々なシンポジウムやセミナーが精力的に開催されてきました。テーマが多様で、ご参加されている皆さんもいろいろな方がいらっしゃいます。それぞれの議論を注意深く見てみると、いっけんバラバラなテーマが「文化資源」というキーワードでつながっていることに気づかされます。（陸）

5年の活動の一つの節目として、吉見幹事長のインタビューを行いました。東京文化資源会議および文化資源区構想が目指すものについて、改めてまとめる良い機会となりました。上野ナイトパーク構想など新たな取り組みも生まれてきているなか、2019年、そして2020年に向けて今年はどのような活動の年となるか。いまから楽しみです。（江）

この季節は花々の移ろいが早く、日ごとに見える景色が変わります。通勤途中も今日限りの風景を見逃すまいと、きょろきょろしています。どんどん変わるのは春の景色だけではありませんね。季節問わず続々と進むプロジェクトの数々を、リアリティ持って皆様にお伝えできますように。（雅）

T-Cha

［ティーチャ］東京文化資源会議ニューズレター　No.7

渋み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会　デザイン：渋井史生(PANKEY inc.)　執筆：江口晋太朗(TOKYObeta Ltd.)

写真：鈴木渉　印刷・製本：スターツ出版株式会社　発行人：東京文化資源会議　発行日：2019年3月31日

〒101-0054　東京都千代田区神田錦町2-1　TEL：03-5244-5450　FAX：03-5244-5452　MAIL：info@tohbun.jp　URL：http://tohbun.jp/

T-Cha